

第34回やまぐち眼科フォーラム

日本眼科学会専門医制度生涯教育事業（認定番号：16861）

日時：2021年1月16日(土) 17:00～19:00

会場：翠山荘 2F 「カトレア」

〒753-0056 山口県山口市湯田温泉3丁目1-1 電話：083-922-3838

会費：3,000円

開会の辞

大西 徹 先生 山口県眼科医会 会長

【特別講演1】

◇座長◇

大西 徹 先生 山口県眼科医会 会長

「AI時代の緑内障診断」

三木 篤也 先生

大阪大学医学部 寄付講座 准教授



【特別講演2】

◇座長◇

木村 和博 先生 山口大学眼科 教授

「瞬目による摩擦を考える-関連疾患とその病態」

白石 敦 先生

愛媛大学医学部眼科学教室 教授



※当日はお弁当をご用意しております

※COVID-19感染拡大のために、特別講演講師の三木篤也先生と白石敦先生の来県が難しくなりました。したがって、特別講演は会場（翠山荘）と大阪府・愛媛県の拠点をつないでオンライン講演を視聴することとなりました。何卒ご理解のほど、よろしく願いいたします。

共催：山口県眼科医会 / 参天製薬株式会社

第34回やまぐち眼科フォーラム

◇演者◇

三木 篤也 先生 大阪大学医学部 寄付講座 准教授

眼圧依存性、進行性の視神経症である緑内障の診断は、眼圧検査(眼圧の把握)、眼底検査(視神経の構造的障害の把握)、視野検査(視神経の機能的障害の把握)に基づいて行われます。緑内障による失明ゼロを目指すためには、早期発見、早期発見が特に重要です。最近、OCTなどの画像診断の進歩により、構造的視神経評価が客観的、定量的に行われるようになり、特に前視野緑内障などの早期緑内障の診断精度が上昇しました。このことは、きっと将来の緑内障失明を減らすことに貢献してくるはずで、緑内障診断の進歩は、診断技術の進歩とともにあります。今後は、人工知能(AI)などの科学技術の更なる進歩の波が緑内障診断の世界にも押し寄せてきます。本講演では、まずOCTを初めとした最近の緑内障診断技術の進歩について振り返るとともに、AIやビッグデータなどの新たな技術の参入が緑内障診断学をどのように変えていくのかについても予想してみたいと思います。

◇演者◇

白石 敦 先生 愛媛大学医学部眼科学教室 教授

人は1分間に10~15回瞬目するとされ、1日にすると1万回以上瞬目をするようになる。瞬目は、眼表面の涙液の拡散と排出に働くことで導涙機能とともに安定した涙液膜を形成している。一方で、2つの物質表面の間には運動という物理現象のもとで「摩擦」が生まれることが知られており、瞬目時にも眼瞼結膜と眼表面の間に摩擦が生じている。適度な摩擦は上皮のターンオーバーに寄与して、眼表面の恒常性や快適な視機能を維持する役割を果たすが、病的に摩擦亢進すると過度な上皮細胞の脱落が生じ、角結膜上皮障害が生じる。この代表疾患として、上輪部角結膜炎 (Superior limbic keratoconjunctivitis; SLK) やLid Wiper Epitheliopathy (LWE) などがある。一方で、ドライアイにおける涙液の減少、不安定化は摩擦亢進の原因となり、不快症状や上皮障害を引き起こされる。眼表面の涙液貯留のほとんどはtear meniscusに散在しているとの定説があるが、眼瞼結膜と眼球結膜の間はKessing Spaceと呼ばれる空間があり、このspaceも涙液のリザーバーの役目をしていると思われる。しかしながら、このKessing Spaceについてあまり議論されることはない。我々は、瞬目時の摩擦ストレスを眼瞼圧測定による定量化の試みを行ってきており、角結膜上皮障害に眼瞼圧が関与していることを示してきた。本講演では、瞬目に関連した眼表面疾患の病態メカニズムを眼瞼圧の測定結果を照らし合わせて解説したい。